

阿倍野空き家コンバージョンプロジェクト

— 空き家を再び地域のつながりの居場所へと変える改修プロジェクト —

学校名 修成建設専門学校

所属学科 著者名 建築学科2年・山口 桃代・山下 愛美・沖田 菜都美・栗山 建

建築学科1年・中本 青輝・田代 星空・花房 英一郎

(指導教員：見邨 佳朗、吉田 秀栄)

1. 建物所有者さんの思い

本プロジェクトの始まりは、大阪市阿倍野区にある建物所有者さん(以降Oさん)から本校講師へ相談があったことからでした。この建物は長らく使われておらず「空き家」の状態が続き、これからも使用する予定はなく、建物を使わないままにしておくのはもったいないので何かいいアイデアはないかというご相談内容でした。

この建物は商店街の中に位置しますが現在は商店街の機能はほとんどなく店舗が建替えられ、戸建て住宅も少なくありません。Oさんの幼少期はお店がならび子供たちも多く活気のある雰囲気だったそうです。昨今問題になっている空き家率の上昇や高齢化から少し物静かな場所となっています。

Oさんは2つの要望がありました。1点目は生まれ育ったこの地域のためになる場所になってほしい。2点目はせっかくだから学生たちの自由な発想で面白いものにしてほしい。

2. 現地調査

本プロジェクトは建物の使い方提案も含まれることからプロジェクト完成までの期間が長く授業内で完結することが難しいため、有志学生らによるプロジェクトとなりました。

まずは建物とその周辺の調査を行いました。Oさんの「地域のためになる場所」という思いから、まずは周辺の街並みや人の流れ雰囲気など1日かけて観察を行いました。学生たち自身の目で観察し学生ら同士で発見を話し合うことで、多くの発見をすることができました。調査の時点では周辺環境でどの点が建築設計と関係性があるかわからないため、気になった点はキーワード化してメモしておく、写真に

おさめるようにしました。次に建物の調査です。細かな採寸よりもこの建物の特長や面白いところ、価値を掘り起こすところに重点をおいて調査しました。

3. 情報の共有とディスカッション

設計の主な進め方は1.各自提案をしてOさんに一番良いと思う案を採用しその案を中心に設計を進める 2.学生らで様々なテーマでディスカッションを行いながら各自提案をしながらもそれぞれの案でよい点を取り込む形式、とありますが今回は多くの学生で設計経験ができるように2番の方式を採用しました。

現地で学生らが感じたことの共有するためにKJ法を用いて「地域から気づいたこと」「建物からわかったこと」「地域コミュニティとは何か?」の3つテーマでディスカッションを行いました。KJ法により紙にアウトプットすることで口頭で話すよりもアウトプットした内容が明確になりディスカッションが苦手な学生も考えを表現することができます。設計の前にディスカッションを行うことで誰もが感じたこと、気づけなかったことの発見をつくり学生らの目標設定の方向性がまとまります。

4. 地域コミュニティの可能性

Oさんとどのような使い方にするか話し合った結果「地域のためになる場所」という要望からシェアキッチン型の地域コミュニティとなりました。今回のシェアキッチンはすべての曜日・時間で使われるのではなく、例えば小学生の下校時などはフリー時間を設け地元の高齢者に運営を手伝ってもら

いながら子どもたちの寄り道の間や地域住民を対象としたイベントを開催します。建物の改修費や維持費をシェアキッチンの使用料で回収しながら、空き時間で地域のつながりの場を提供します。

5. 施主プレゼン

講師との対話、学生同士のディスカッションを繰り返しながら各自設計プランをブラッシュアップさせていきました。通常の授業では建築の知識のある講師に設計プランを見せるので、学生たちの説明が不足しても講師は学生たちの言いたいことを理解することができますが、建築の知識のない人への説明は難しくなります。このような経験は社会人になってからが多く、今回は学生たちがOさんへ直接プレゼンすることで説明することの難しさを体験的に知ってもらおう機会となりました。

プレゼン準備には十分な時間をとり本校にてOさんへのプレゼンテーションを行いました。講師や学生たちディスカッションを踏まえた上で学生たちがそれぞれ提案を行いました。Oさんには一人ずつ提案内容を聞いてもらい、各案の良い点を挙げてもらいました。

学生たちの提案の中で採用された案は、

- ・既存の階段を壊さずにリメイクする。
- ・Little Free Libraryの仕組みを取り入れ本を通じて地域のつながりを作る。
- ・授乳室やおむつ交換台などが行える誰もが気軽に利用できるプライベート室を作る。
- ・道路に面する壁はガラス窓を多く使い外部に開けたデザインとする。

建物所有者であるOさんへのプレゼンテーションはうまく伝わらないこともあり多くの対話が必要となりました。Oさんも学生たちも面白いものを作りたいという気持ちが同じだったことからプレゼンテーションは長時間にわたりましたが全員がディスカッションすることの重要性と楽しさを体験することができたと感じています。

6. 解体・測量

Oさんへのプレゼンテーションでは課題も見つかりました。特に実際の建物設計に必要な細部の設計が未検討の部分があります。これも授業で行う

設計課題では考えきれない部分であり設計の思考の深さを経験できたと思います。

コンセプトの大きな方向性が決まったことで建物のどの部分を解体するかがはっきりしました。細部の検討も含めてこの時点で解体作業をすることになりました。一般的な工事では設計が完全に完了してから解体工事が始まりますが、学生たちに建物を再度観察・調査するために、学生たち主体の内部解体工事を行うことにしました。

建物の内部解体には学生たちの安全性を考えて同時作業できる人数を4名までに絞り、職人さんを招いて解体前や解体中のレクチャーを行いました。学生たちは建物内部の状態は図面や写真でしか見たことがありませんでしたが、解体作業を通じて実物を目の前で確認することで図面の意味をより理解することにつながりました。解体終了後に細かな部分の測量を行い、詳細設計へと進めていきます。

7. 2→1年生へのバトン

本プロジェクトは当初は1年生が主体でしたが、プロジェクトを進行する中でメンバーが2年生になり新1年生が新メンバーに加入しました。新メンバーは解体作業から参加しています。専門学校は2年間という短い期間のため1,2年生間のつながりがありありません。今回のプロジェクトは1,2年生と一緒に解体や設計を行うことで2年生は経験や知識を1年生へ伝え、1年生は年齢の近い人から建築を学ぶ経験を得ることができました。

建築の授業では机上での学びが多く実寸大のスケールでものを考える作るといった経験はほとんどありません。今回のプロジェクトは通常の学びの中では得にくい経験と発見を生み出し、それが建築に対する視野を広げ多角的な物事を考えることができる学生へ成長してれると思います。

阿倍野空き家改修プロジェクト参加学生
修成建設専門学校

山口 桃代、山下 愛美、沖田 愛美、栗山 建、中本 青輝、田代 星空、花房 英一郎(順不同)
(指導教員：見邨 佳朗、吉田 秀栄)